

川越宗一氏の長編『パシヨン』を一気に読んだ。「パシヨン」はキリシタン用語の「受難」という意味で、江戸時代のキリシタン迫害を描いた物語である。長崎を中心に、アジアの諸都市、ヨーロッパの諸都市を遍歴する、歴史を踏まえた壮大なフィクションである。

主人公は関が原での戦いで敗れた戦国キリシタン大名・小西行長の孫の小西彦七、洗礼名マンショで、「最後の日本人司祭」になった人である。彼の過酷なパシヨンの生涯を描いている。祖父・行長は斬首され、母・マリヤは対馬藩の宗家に嫁ぐが離縁され、子ども彦七を連れて長崎に向かう。彼女は早逝し、彦七は孤児となる。孤児となった彦七は小西家の遺子として育てられるが、小西家再興の重圧の中、信仰の道を選び取って行く。時は、キリシタン弾圧のますます激しくなっていく時代で、過酷な迫害を受けるが、「転ぶ」と地獄に落ちると教えられたキリシタンは、信仰を守り抜く。ヨーロッパから来た司祭たちも、禁教令の下、国外追放や殉教に追いやられ、秘蹟（サクラメント）を執行する司祭が少なくなる。彦七はパシヨンの中、キリシタンの信仰を支えるため、司祭になろうとする情熱と使命を抱くようになる。長崎を発ち、アジアの諸都市を巡り、ポルトガルに着く。当時の航海は、まさに命がけで、地獄のような苦しい体験をする。ローマに辿り着き、学び、司祭に任命される。司祭になった小西マンショは、秘蹟を授け、信仰を守るために、帰国し、長崎に帰って来る。心に残るパシヨンの実態の二つを書きたい。

司祭・小西マンショが長崎に帰った時、天草四郎を頭とした百姓一揆の「島原の乱」が起こる。幕府の大軍勢に囲まれ、兵糧攻めに遭い、飢餓のため朦朧となり、城内は危機を迎える。その時、天草四郎は「どうせキリシタンは皆殺しになる。最後まで戦い、一緒に死んでやるしか私にはできません」と言うが、小西マンショは「教えを捨てればいい。放免されて落ち着いたら、棄てた教えを取り戻せばいい。悔いれば罪は赦される。司祭の俺が言うんだから間違いない」と、転びを勧め「生きよ」と説く。遠藤周作の『沈黙』を想起する。城から逃げ延びたキリシタンたちは「ナンマンダブ」という題目を唱えていた。小西マンショは生き延び、隠れて「秘蹟」を授け、キリシタンを支えるが、捕えられ、江戸に送られる。そこで、キリシタンを撲滅する役目を負った公儀総目付の井上筑後守政重と対面する。井上は「岐部は転ばなんだ。儂が命じた穴吊りにも耐えた。だが、焼き鋺で責められて死んでしもうた」と、拷問で脅し、転びを誘う。岐部とは、私の郷里の国東半島出身のキリシタンで、マカオに追放され、そこから、イスラエルまで旅し、ローマに行き、「最初の日本人司祭」になったペトロ・岐部である。密かに帰国し、司祭として励むが、捕えられ、江戸に送られ、フェレイラ神父と対面する。フェレイラはどんな拷問にも耐えたが、「お前が転べば、キリシタン殺害を止める」と聞き、転び、「沢野忠庵」の日本名を受け、棄教を勧める役目に着く。ペトロ・岐部は沢野に転びを促がされても、拒否し殉教する。小西マンショは、井上からの拷問の脅しに臆することなく「井上、おまえを赦す。赦されたいと思うなら、すぐに赦す」と、司祭としてキリシタン迫害を止めよと質した。しかし、江戸幕府を守るためにキリシタン撲滅を計る井上によって、逆さに吊るされ、長時間の穴吊りの苦痛の中で死んで行く。彼は、他人には「転べ、生きよ」と勧めたが、自分は転ばず、殉教した訳である。小西マンショの知人に子どもが生まれ、幼児洗礼を授ける時、洗礼名を「マンショ」にした。小西マンショは生きていると、小説は終わっている。キリシタン迫害は、権力を維持するために、邪魔者を抹殺する狂気であるが、それに抗い、自由を渴望する民衆は存在する。その存在が自由を獲得していくのである。